

難病受け入れ体験記に懸賞 ～患者の心の支えに～

難病受け入れ 体験記に懸賞



懸賞論文の意義を語る西谷裕・元
宇多野病院長（京都市下京区・京
都武田病院）

元 宇多野病院長、受勲祝いで創設

「患者の心の支えに」

昨春の叙勲で瑞宝中綬章を受けた、京都市右京区の国立療養所（現・国立病院機構）宇多野病院の元院長、西谷裕さん（七八）＝上京区＝がこのほど、友人や恩師からの受勲祝いの一部を京都難病団体連絡協議会に寄付し、それをもとに「難病の受容」をテーマにした懸賞論文が創設された。同協議会は四月一日から応募を受け付け、最優秀作品に副賞十萬町を贈る。

西谷さんは一九七八年から九四年まで宇多野病院で副院長、院長を歴任。重症筋無力症とパーキンソン病治療の権威とされ、現在は同病院の名誉院長、京都武田病院顧問を務めている。昨春の受勲以来、祝賀会などで祝い金が寄せられ、その活用法として難病患者支援のための寄付を思いついた。祝い金の一部に自身の寄付金を合わせた計五十万円を寄託し、患者とその家族の精神的支援を目的とした懸賞論文の創設を提案した。

同協議会は今年一月下旬の理事会で懸賞創設を正式決定。来年度から募集を開始する予定で、現在、詳しい募集要項や選考方法を検討しているが、京都府、滋賀県、大阪府に在住の難病患者やその家族を対象に「難病をどう受け入れたか」の体験記を募る。難病患者は現在、全国で約五十七万人、京都府内では約一万三千人。同協議会は「罹患する確率が非常に低く、根治も難しいことから、患者とその家族は『どうして自分たちだけが』と深い孤独感や絶望感にさいなまれている。受け入れがたい病をどう受容したのかという記録は精神的支えになるはず」としている。

懸賞論文の意義を語る西谷裕・元宇多野病院長（京都市下京区・京都武田病院）

昨春の叙勲で瑞宝中綬章を受けた、京都市右京区の国立療養所（現・国立病院機構）宇多野病院の元院長、西谷裕さん（七八）＝上京区＝がこのほど、友人や恩師からの受勲祝いの一部を京都難病団体連絡協議会に寄付し、それをもとに「難病の受容」をテーマにした懸賞論文が創設された。同協議会は四月一日から応募を受け付け、最優秀作品に副賞十萬町を贈る。

西谷さんは一九七八年から九四年まで宇多野病院で副院長、院長を歴任。重症筋無力症とパーキンソン病治療の権威とされ、現在は同病院の名誉院長、京都武田病院顧問を務めている。

昨春の受勲以来、祝賀会などで祝い金が寄せられ、その活用法として難病患者支援のための寄付を思いついた。祝い金の一部に自身の寄付金を合わせた計五十万円を寄託し、患者とその家族の精神的支援を目的とした懸賞論文の創設を提案した。

同協議会は今年一月下旬の理事会で懸賞創設を正式決定。来年度から募集を開始する予定で、現在、詳しい募集要項や選考方法を検討しているが、京都府、滋賀県、大阪府に在住の難病患者やその家族を対象に「難病をどう受け入れたか」の体験記を募る。

難病患者は現在、全国で約五十七万人、京都府内では約一万三千人。同協議会は「罹患する確率が非常に低く、根治も難しいことから、患者とその家族は『どうして自分たちだけが』と深い孤独感や絶望感にさいなまれている。受け入れがたい病をどう受

容したのかという記録は精神的支えになるはず」としている。

実際の新聞記事

2007年 2月 9日付 京都新聞(夕刊) より